

〈研究ノート〉

サンパウロ市リベルダーデ地区における 戦前・戦中期の日系教育機関

——エスニックコミュニティ母語学校としての役割に注目して——

根 川 幸 男

1. 問題の所在と目的

小稿の目的は、戦前・戦中期ブラジル最大の日系人都市集住が見られたサンパウロ市リベルダーデ地区にあった日系教育機関を概観し、これらの機関の形成と変容あるいは消長について分析することにある。特に、同地区の日系諸学校のエスニックコミュニティ母語学校としての機能に注目し、それらの日系コミュニティのウチとソトにおける役割を明らかにするための前提となる作業を行なう。

日系移民の教育史では近年さまざまな成果が上がっているが、ハワイ、北米を対象地域としたものが多く、南米ブラジルを対象としたものはまだ多くはない。日系教育機関の果たした役割についての研究も同様な傾向にあると言える。例えば、森本（2005）は、アメリカ合衆国のエスニックコミュニティ母語学校としての日本語学校を研究する中で、「言語の機能にはコミュニケーション的な言語運用的側面と象徴的な側面がある。仮に、前者に変化が生じ、母語話者が消滅の危機にさらされたとしても、後者は生き残り、『集団の表象、象徴、復興の契機』となりうる」というエドワーズの指摘（EDWARDS, 1985, p. 17）を引き、「母語学校の役割は、まさに、この両面に目を配る必要がある」とし、「年中行事や運動会を通じてのコミュニティセンター的役割」など、日系教育機関の多様な役割を指摘している（pp. 89-90）。

ブラジルの場合、戦前、いわゆる日本人学校は500近い校数を数えた¹⁾。それらは、ウチには日系各コミュニティの統合機関として機能し、ソトには「日本文化」の集団的表象の主体としての役割を担い、戦時中は当局の弾圧の対象にもなった。

小稿では、文献調査とインタビュー調査を中心に、上記のような日系教育機関の概観、役割解明とともに、ブラジル日系移民史の中での課題を整理し、今後の研究の展望を述べたい。それは、戦後、同地区が日系集住地区として存続し、サンパウロ東洋街（Bairro Oriental 以下、東洋街と略す）という世界最大の日系エスニックタウンを形成していく前史を確認するための作業とし

1) 80年史編纂委員会（1991）によると、当時の邦字紙の一つである『ブラジル時報』は、1938年10月21日付の記事において、日本人小学校476校と報じている（p. 81）。

ての意味も合わせ持つことになる。

2. 依拠すべき基礎資料

戦前のブラジル日系教育機関と子弟教育の状況については、ブラジル日系コミュニティにおいて刊行された『伯刺西爾年鑑』（1933, 以下『年鑑』）、『移民四十年史』（1949, 以下『四十年史』）、『移民の生活の歴史——ブラジル日系人の歩んだ道——』（1970, 以下『移民の生活の歴史』）、『ブラジル日本移民70年史』（1980, 以下『70年史』）、『ブラジル日本移民八十年史』（1991, 以下『80年史』）などが、それぞれ独立した章や節を設けて、それらの形成や変遷について記述している。また、各地の日系コミュニティや学校、青年会や婦人会などが多くの記念誌を発行しており、それらの資料からも関係した教育機関や子弟教育の詳細を知ることができる。加えて、戦前から発行されていた邦字新聞には、各機関の行事や広告記事がしばしば見られ、貴重な同時代史料たりうる。

これらの他に、『ブラジル日本移民・日系社会史年表——改訂増補版——』（半田知雄編著 1996, 以下『年表』）は、1748年からのブラジル日系移民の前史と1908年～1995年までの全史を網羅した労作であり、教育に関する事項も多く、ブラジル日系教育機関と子弟教育の状況を俯瞰するのに便利である。

以上は、ブラジルで刊行された資料であるが、日本側資料については小嶋（2000）が、外務省・拓務省等の報告書、移民事業団体などの出版物、元領事の講演記録、視察報告、視察報告以外の報告書などに分類し、在伯邦人子弟教育をめぐる日本側の対外方針について検討している。小嶋の指摘の通り、ブラジルの日系移民教育史の研究はブラジル側資料の分析を中心にしており、日本側資料の参照はほとんど行われてこなかった（小嶋, 2000, p. 105）。

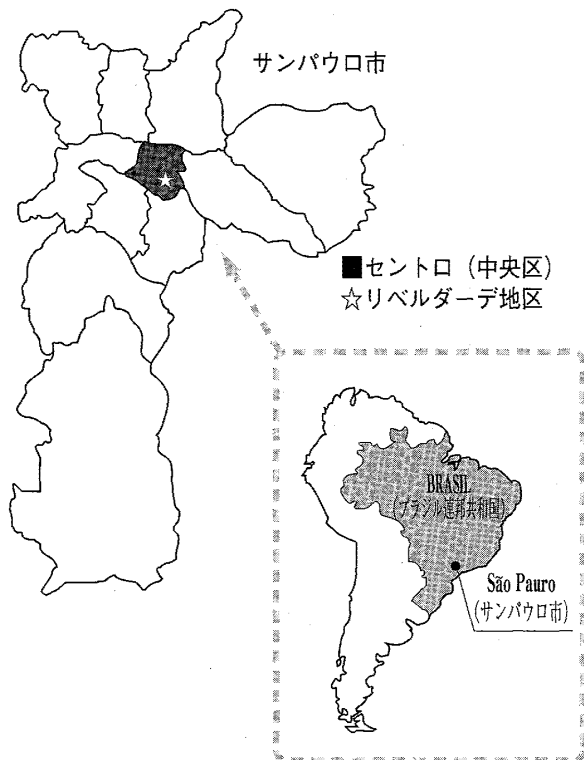
ブラジル側、日本側を問わず、ブラジル日系移民教育史の資料はまだ未開拓の状況にある。卒業生や就学経験者、教師、父兄会会員など日系教育機関に関係したインフォーマントへのインタビューやドキュメント収集も、ハワイ・北米を中心とした研究に比べて、進んでいるとは言えない。今後、日系移民教育史が、例えば吉田（2005）が指摘するようなクロスナショナルな展開をすべきだとしたら（pp. 17-18）、ブラジルと日本の双方において資料の収集とつき合わせがますます重要となるであろう。

小稿では、筆者の調査状況や紙幅の都合から、主に上記の『年鑑』、『四十年史』、『移民の生活の歴史』、『70年史』、『80年史』、『年表』などに加え、後述する聖フランシスコ・シャビエール学園やサンパウロ女学院によって刊行された記念誌を利用した。また、邦字新聞は、筆者の調査の進展状況により、ごく一部の利用にとどまった。小稿で概観した日系教育機関に関係したインフォーマントへのインタビュー調査で得られた証言も、大きな比重をしめている。なお、小稿で使用した資料で旧字体のものは、適宜新字体に改めた。

3. リベルダーデ地区と日系教育機関

日系教育機関といっても、時代と地域によって様相はかなり異なる。ここではまず、対象地域をサンパウロ市リベルダーデ地区に限定した理由を記しておきたい。同地域は、サンパウロ市を構成する Subdistrito (街区) の一つであり、サンパウロ市のほぼ中心に位置する (地図1・2 参照)。現在、世界最大の日系エスニックタウンと呼ばれるサンパウロ東洋街を有し、商業・観光エリアとして知られる。

地図1 リベルターデ地区の位置



この東洋街の形成については別稿 (NEGAWA, 1998; 同, 2001; 根川, 2006) において詳述したので、ここでは詳しくは述べないが、戦前すでに同地区内のコンデ・デ・サルゼーダス通りやコンセリェーロ・フルタード通り、エストゥダントス通りを中心とする一角に「コンデ街」(以下、「コンデ街」と略す) と通称されたかなりの日系住民の集中が見られた (NEGAWA, 1998, p. 242)。後述するように、このエリアにブラジル最初の日本人学校である大正小学校が開かれた。この後、リベルダーデ地区には、後に述べるような多くの日系教育機関 (聖州義塾、聖フランシスコ・シャビエール学園、同学園女子部、日伯裁縫女学校、サンパウロ裁縫女学院、それらの寄宿舎など) が展開すること

になった (地図2 参照)。戦前・戦中のブラジルで、これほど日系教育機関が集中し充実した地域はおそらく他に見られなかっただろう。以上のような理由から、小稿では戦前・戦中期の同地区を対象地域として選択した。

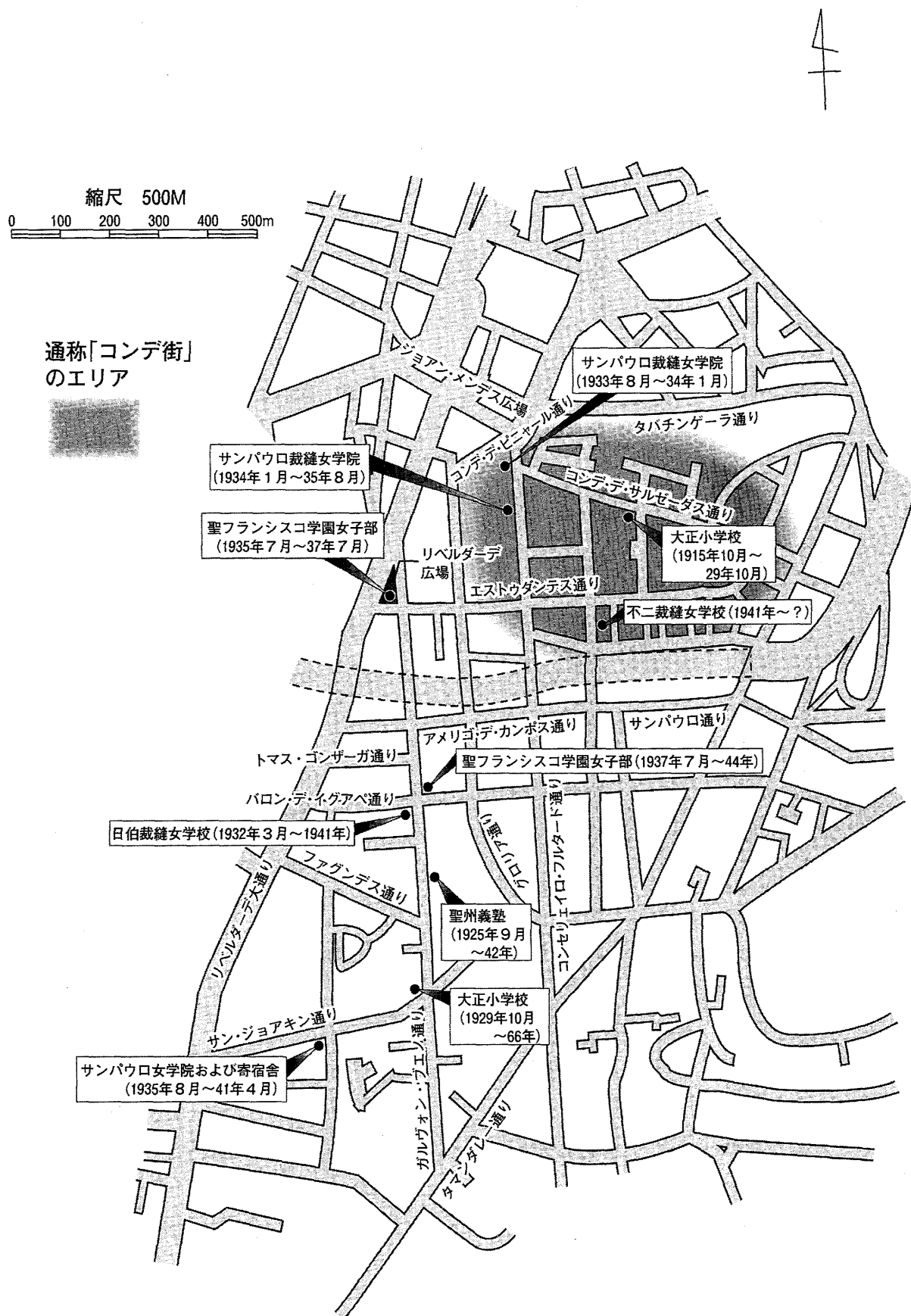
4. コンデ街の発生と大正小学校²⁾

ブラジルへの日本移民は、1908年の笠戸丸移民からはじまるとされる。それ以前に、漂流者や海軍関係者、公使館関係者、少数の自由渡航者や商人がいたことが知られている (『四十年史』, pp. 2-25; 『移民の生活の歴史』, pp. 168-169; 『80年史』, pp. 30-34) が、近代的・組織的な移民

2) 本節のコンデ街および大正小学校に関する記述は、おおむね上記の『年鑑』, 『四十年史』, 『移民の生活の歴史』, 『70年史』, 『80年史』, 『年表』とパウリスタ新聞 (1975) によった。

地図2 戦前・戦中期におけるリベルターデ地区の日系教育機関

（※街路は2006年現在のもの）



がはじまったのはこの笠戸丸移民からと見てよいだろう。

戦前のブラジルの日系教育機関は、多くが日本人会や父兄会を経営基盤としていたので、当然日系人が集中する地域に開設された。ここでは、ブラジル最初の日本人集住地である「コンデ街」と、そのエリアに創設されたブラジル最初の日系教育機関である大正小学校の関係について概観しておきたい。

サンパウロで最初の日系人の集住地は、同市中心部に近いコンデ・デ・サルゼーダス通りを中心とする一角であった（地図2参照）。1933年にサンパウロの都市部で生活するに日系人は、600家族3000人に達していた。これらの都市部に住む日系人は、ほとんどが1917～1918年ごろに地方からサンパウロに出てコンデ街に集住したものであった。これは、就労機会の多かったサンパウロ中心部に近く、帝国総領事館、海外興業事務所（移民組合を1917年に改組）、ブラジル拓殖組合事務所など公共性の高い機関も市中心部にあったこと、その上に家賃が安かったことなどがあげられる。後にリベルダーデ地区に日系教育機関が集中していったのも、こういった日系人の集住と共通の要因であろう。

この後、コンデ街は日本人街として発展していくが、この日系人の集住に関心を寄せたブラジル人研究者がいた。シカゴ派都市社会学のドナルド・パーソン（PIERSON, Donald）は、1930年代にサンパウロ政治社会学院で教鞭をとり多くの弟子を育てただけでなく、ブラジル都市社会学の基礎を築いた。その弟子の一人であったオスカル・アラウージョ（AREÚJO, Oscar）は、1930年代後半のコンデ街の様子を、ブラジル人のまなざしによって次のように描写している。

この通りの商店は、おおむね日本人たちによって営まれ、好奇心をそそられる東洋的な雰囲気をかもし出している。そこでは、「味の素」や「信用カレー」などといった日本からの直輸入品とデリケートで興味深い装身具、日本人だけが成しうる洗練と習慣に簡単に会うことができる。そして、商店の広告と看板だろうか。一部であるが、特別な印による表現、日出ずる国の文字によって書かれたもの。こちらには日本人ペンションの看板、あちらには日本人ホテル、そして向こう側には散髪屋や洗濯屋があるといったぐあいである（AREÚJO, 1940, p. 237）。

大正小学校は、ブラジル最初の日系教育機関としてこのコンデ街の中心、コンデ・デ・サルゼーダス通りに創設されるのであるが、日系住民たちがこのエリアに集まってきた理由は、子弟の教育問題にも原因があった。実際、都市部に限らず、移民一世の親たちにとって、子弟の教育は切実な問題であった。『80年史』では、ブラジル日系移民一世の親の教育ストラテジーを次のようにまとめている。

集団地（植民地）が形成されると、直ちに作られるのが日本人会である。相互の親睦と協力を計り共通の問題の解決のために連絡して当たることを目的としたが、一番大きな目的あるいは事業としたのは子弟の教育の問題であった。幼くして伴って来たもの、ブラジルで生まれたものを、何とかして日本人の子供らしく育てたい、やがて日本へ帰った時に困ること

のないくらいに、日本語の素養と日本的な知識・精神を授けて置きたい、というのは親としての移民の誰もの願いであった。」（『80年史』，1991，pp. 60-61）

つまり、当時はまだブラジル移民には出稼ぎ的戦略が強く、ブラジル生まれの日系子弟は「日本人」になるための教育が必要とされていたのであった。

『年表』では、コンデ街での日系教育の開始と発展を次のように記している。

1915年10月7日：大正小学校出現，サンパウロ市コンデ街（Conde de Sarzedas）38番（現在の308番）に大正小学校が始められる。生徒3人。教師は宮崎信造（みやざき・しんぞう）さんらの手により創設された。最初こそ生徒3人の寺子屋式であったが、後には後援会もでき、生徒はどんどん増えていった³⁾。（以上，『年表』，p. 36）

大正5（1916）年1月，コンデ街51番に移り，同年48番に戻り，児童10数名となる

大正8（1919）年1月29日，私立公認校となる。翌9年1月23日後援会創立（以上，『年表』，p. 36）

大正小学校は、1929年10月、同校の父兄会の協力と総領事館の全面的支援により、現在ブラジル日本文化協会ビルのあるサンジョアキン通りに移転した。新たに購入した新校舎は、階下に8教室、職員室、二階は教育父兄会の寄宿舎を備えていた（パウリスタ新聞，1975）。1932年からは、日本の外務省を通じて、日本の師範学校を卒業した複数の教師が派遣されるようになり、ブラジル日系人教育の中心的機関になっていった。

また、天長節をはじめとする四大節などサンパウロ日系社会の主要行事も、同小学校で領事館員の立会いのもとに執り行なわれた。いわば日系コミュニティの文化的・精神的統合のための施設として、まさに森本（2005）が指摘したような「言語の機能にはコミュニケーション的な言語運用的側面と象徴的な側面」の両面をささえるエスニックコミュニティ母語学校としての性格を強めていった。

写真1 大正小学校の生徒たち（1940年頃）



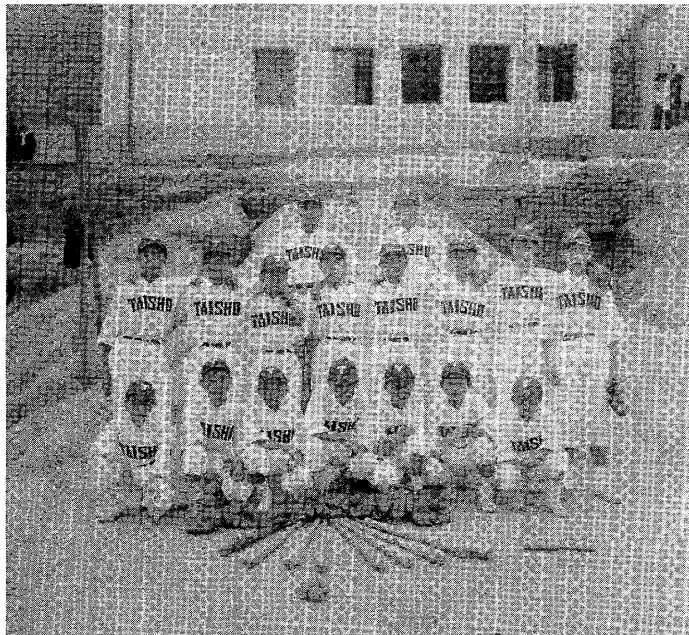
3) 同年表の「参考」として、次のような注記がある。「大正3～4年頃，コンデで田頭（たがしら）甚四郎（1912年渡伯）なる青年が3～4人の子供にイロハを教えていた。（中略）その後を継いだのが宮崎信造で，彼は1915年10月7日橋本重太郎（橋本亀太郎），西本徳左エ門（西本徳右エ門），藤井吉之助（藤安吉之助）—カッコ内は『拓人の足跡』初版213p.—等の発起でコンデ街38番を校舎として借り，寺子屋式小学校（大正小学校）を始める。」

『年鑑』の「在伯邦人設立小学校一覧」「日本人小学校児童男女別統計」によると、当時の大正小学校は、経営は大正小学校後援会、教員数日本人男性教員2、ブラジル人女性教員1の計3名、生徒は男74女58の合計132名となっている（p. 110, p. 117）。

1930年代後半には同校の経営はサンパウロ日本人会連合会へと移管、教員数9人、生徒数も200名を数え、1938年にはサンパウロ市ピネイロス地区に分校も開かれた。

当時の教授科目は、国語（日本語）・修身・算術・地理・歴史・理科・体操・唱歌で、教科書は日本の国定教科書によっていたが、卒業生や就学経験者へのインタビューでは、かなりリベラ

写真2 大正小学校の野球チーム（1939年6月、全伯少年野球大会出場前に同小学校の校庭で記念撮影したもの）



な教育が行われていたような印象を受ける。

課外活動としては、野球部、陸上部、相撲部などが活発であった。中でも野球は少年スポーツの花形であったが、同校でも早くから野球チームが存在した。コンデ街の「坂下」にあったグラウンドで、コンデ街の“アンチャン”チームと14歳以下の少年チームの試合が行われたのは、1924、5年ごろであった。当時は、少年チームのいでたちは半ズボン姿に豚革の手縫いのグローブ、手製のバットだったが、1930年代後半には、日系運動具店で製造販

売されるようになっていた。写真を見ると、「TAISHO」と書かれたおそろいのユニフォームを着て整列している（写真2参照）。当時の少年野球でのライバルは、後に述べる聖フランシスコ・シャビエル学園やピネイロス地区にあった暁星学園、バストス、アリアンサ、チエテなど地方都市の日本人学校のチームであった⁴⁾。

その他の課外活動として、学芸会・演芸会において、狂言や寸劇、コーラスが催された。このような課外活動や情操教育は、当時ブラジルの学校ではめずらしかった。同校は、後に3人の連邦下院議員、閣僚、ブラジル中央銀行理事、実業家、学校創立者などを送り出すことになる。また、総領事はじめ同館職員の子などとも在学していた。同校は、まさにブラジル日系VIPたちの揺籃というべき機関であった。

4) 1930年代後半に同小学校の野球選手だった渋谷信行（しぶや・のぶゆき、1924年台湾高雄生まれ、1928年3月渡伯）によると、当時の地方小学校の生徒は出生届が遅れ、同じ学年でも一つか二つ年上というのが普通だったため、試合ではどうしても勝てなかったという。

5. リベルダーデ地区の日系教育機関

大正小学校があったリベルダーデ地区には、サンパウロ日系社会の中心として、他の日系教育機関が次々と誕生した（地図2参照）。ここでは、戦前に存在した（一部は現在も存続）同地区の各日系教育機関について概観しておくことにする。現時点で収集できた資料や紙幅の都合で、リベルダーデ地区のすべての教育機関についてふれることはできないので、小稿では、私塾の代表として聖州義塾、ブラジルの国教であるカトリック系教育機関として聖フランシスコ・シャビエル学園と同学園女子部、日系教育機関として特徴的な裁縫女学校の一事例としてサンパウロ裁縫女学院の3校をとりあげたい。

5-1. 聖州義塾（1925～1942）

プロテスタントの小林美登利（こばやし・みどり1891-1961）によって創設された私塾および寄宿舎。『80年史』によると、同塾創立の経緯は、次のようなものである。

1921年、伝道目的でアメリカから渡伯した、プロテスタントの小林美登里（ママ）は、翌22年5月15日、コンデ街の大正小学校で第1回日曜学校を開催し50名ほどの参集者を得た。同年9月7日の独立百年祭には、キリスト教的教育機関「聖州義塾」の設立宣言を行い、2年後の独立記念日には、サンパウロ教会の設立に至っている」（pp. 425-426）

小林成十（小林美登利の三男）「小林美登利氏履歴」によると、「1925年、9月7日、独立記念日を期し、聖州義塾をサンパウロ市、ガルボンブエノ街、85番地に設立し、新来移民にはポ語教室を設け、在伯邦人子弟には、日本語を教えた。スポーツでは剣道、野球、柔道を奨励指導し、また全伯柔剣道連盟の発起人の一人でもある。」とあり、同塾の活動として、日本語・ポルトガル語クラス、柔道場、剣道場があったことが知られる⁵⁾。

寄宿舎が広い意味での教育機関を兼ねたことは、当時の日本と事情が似ている。『移民の生活の歴史』には、「日本人会の仕事の第一が教育事業であることは植民地の章でもかいたが、地方都市においては寄宿舎を経営して、主として、小学校以上のブラジルの学校に通わせたり、共同生活のなかで団体訓練をほどこしたり、日本語を教えたりした」（p. 504）と。また、『70年史』によると、「また、学校というより寄宿舎といった方がいいくらい、ここに宿をとり生活しながら、ブラジルの学校に通学させていた聖州義塾（1925年開塾）はプロテスタント精神のもとに日常生活の訓練から学業をすすめていた特殊教育機関ともいえる。ここからも多くの人物を出して

5) 先の渋谷氏は、1936年頃、大正小学校に通学しながら同塾の剣道場に通ったという。同氏によると、ガルヴォン・ブエノ通りに面した塾の建物の間口は狭かったが、奥に広い庭があり、そこに剣道場があったという。当時、寄宿生は40人くらい。日本人向けのポルトガル語教室も開かれていたということであった。

いる」(p. 310) と。

先の『年表』によると、1924の項に、「刊行物 聖州義塾 市民第1号発行」(p. 53) と、会報の刊行が知られ、1926年1月には第2号を発行している(同, p. 57)。また、塾友会誌『塾友』を謄写版で発行した(同, p. 59) とされており、各種の刊行物があったことが知られる。また、同『年表』には、1938年に、アマゾンにあった日系海外殖民学校の校長であった崎山比佐衛の講演会「アマゾン語る」が聖州義塾で行なわれるとある(同, p. 88) から、このような文化事業も同塾で行われていたことが知られる。

後述するように、ブラジルでは1937年からはじまるナショナリゼーション政策により、14歳以下の児童・生徒への外国語教育は禁止された。また第二次世界大戦勃発により、同塾は立ち退きを命ぜられ、1942年に閉塾となった。

5-2. 聖フランシスコ・シャビエール学園 (1928～)⁶⁾

ベネジクト会サン・ベント会修道院長ドン・ミゲル・クリセ神父、イエズス会士で当時サン・ゴンサロ教会に所属したギード・デル・トーロ神父、中村長八神父らによって、日本子弟へのカトリック布教を目的に創設されたカトリック超宗派の教育機関。先述した大正小学校と勢いを争った学校である。

写真3 聖フランシスコ・シャビエール学園女子部の聖体拝領式 (1940年代初頭)



聖フランシスコ・シャビエール学園は、1928年2月7日、リベルダーデ通り149番にあった家屋を賃貸して授業を開始した。初代校長は青木新刀であった。1930年12月31日にはイピランガ地区の新校舎に移転したが、1935年にリベルダーデ広場143番に同学園女子部が開設された。また、この女子部は、1937年には新校舎落成にともない、ガルヴォン・ブエノ通り297番へ移転し、学

6) 本節の同学園に関する記述は、おおむね上記の『四十年史』、カトリック教義研究会 (1949)、青木 (1955)、前山 (1996)、同学園ウェブサイトの“Colégio São Francisco de Xavier: História”によった。

校の規模も大きくなった⁷⁾。

1935年には、市当局から同学園にブラジル有資格者教師が5名派遣されることとなった。1936年には生徒240名を数え、教室、寄宿舎、食堂、学園付属仮聖堂を完備。1940年には司祭館、1943年2月には、学園付属仮聖堂の本建築が完成した。1945年には、タマンダレー通りに建物を、孤児院を建設、女子部もそちらに移ることとなった。

学校経営の中心的人物ギード神父がイタリア人であったために、戦時中当局から迫害を受けたという証言を卒業生の一人から聞くことができた。戦時中のこの種の「迫害」については、小稿で利用した資料、カトリック教義研究会（1949）や青木「初期のサン・フランシスコ・シヤビエル学園と設立の由来」（1955）では触れられていない。「若し彼等（筆者注：日系人）の過半数をカトリック教化に成功するならば、それは大なる貢献である。カトリック国であり移民国であるブラジル人達から、優秀な移民として喜ばれ、両者共存の実を挙げることができる」（青木、1955, p. 70）という創立者の一人ミゲル・クリセの言葉に表されているように、同学園がカトリック教化を通じて日系人のブラジル社会への同化を志向・促進したことは想像に難くない。

5-3. サンパウロ裁縫女学院（1933～）⁸⁾

赤間重次・みちへ夫妻によって開設された「裁縫教授所」を前身とする女子教育機関。

佐藤（1985）によると、1933年4月にサンパウロ市トラヴェッサ・サンパウロ通りに、赤間重次・みちへ夫妻が「裁縫教授所」を開設し、同年8月1日、コンセリエイロ・フルタード通り18番地に移転、同教授所をサンパウロ裁縫女学院と改称する。翌1934年には、同じコンセリエイロ・フルタード通り116番地に移転している。また、1935年には、サン・ジョアキン通り216番地に移転し、日本語小学部・検定準備科・実科高等女学部を次々と設置した。中でも実科高等女学部の設置には、「時代の要求に応じて（中略）単に裁縫技術の教授だけでなく、将来社会の教育界にその一端をになえる指導者の養成を期し、在伯邦人社会に於ける女子中等教育事業に先鞭をつけた」（佐藤、p. 72）と、日系女子教育史における画期として指摘されている。また、この年の4月には校誌『學友』（3号から『學友会誌やまと』に改称）が創刊されている。1937年には、ポルトガル語部を新設し、ブラジル私立学校令にもとづく私立学校として公認され、ポルトガル語名を「Escola Particular Akama São Paulo」とし、日本語名を「サンパウロ女学院」に改称する。付属寄宿舎大和女学寮を有し、1938年の時点で、在校生70名。1941年には、タマンダレー通り849番地に移転。しかし、翌1942年12月に立ち退き命令が出、ヴェルゲイロ通り235番へ移転。リベルダーデ地区を離れることとなった。

こうした裁縫女学校の教育内容とレベルであるが、『70年史』では「その他一九三三年開設

7) 1940年代前半に同学園の幼稚園と女子部で学んだ新井静江（あらい・しずえ、1935年サンパウロ生まれ）によると、同学園で日系子弟に対する洗礼や聖体拝領式が行われたという。

8) 同学院に関する記述は、おおむね『70年史』、『80年史』、『年表』と佐藤（1985）、赤間アントニオ晃平同学院理事長・赤間エルザ澄子同学院長へのインタビューによった。

の日伯裁縫女学校やサンパウロ女学院などの女子教育（いわば花嫁学校）も当時の社会事情にマッチした教育施設であったといえる」（1980, p. 310）とされている。このように、当時の日系コミュニティにおいて女子教育＝「花嫁学校」という認識があったにしても、そういった評価が適当であるかどうかは別問題である。実科高等女学部は、「母国ニ於ケル実科高等女学校程度ノ学科及ビ技能ヲ教授ス」と、当時の雑誌広告（『曠野』9号）にうたっているように、「日本の女学校と同等の学力を習得する目的でつくられた」という。同学院高等女学部の卒業生で元大学教授であるインフォーマントは、そこで日本古典文学を学んだことが後の「万葉集」や「古今和歌集」の研究を行なう契機になったととらえている⁹⁾。以上のことから、「花嫁学校」というイメージを大きく上回るような、相当な内容とレベルの教育が行われていたということが推測される。

このサンパウロ女学院の他にも、同じリベルダーデ地区のガルヴォン・ブエノ通りに日伯裁縫女学校（1932創立）、トーマス・デ・リマ通りに不二裁縫女学校（1941創立）、またそれらの寄宿舎があったことが確認され、同地区が女子教育においても充実した教育機関を有していたことを示している。

6. 戦時下の日系教育機関

ハワイであれ、北米であれ、第二次世界大戦は日系教育機関の変容に大きな影響をもたらした。ブラジルもその例外ではない。

戦前のブラジルでは、人種優生学に基づく白人化（branqueamento）や脱アフリカ化（desafricanização）のイデオロギーが強く（LEITE, 1969, pp. 192-194）、特に、ジェッツリオ・ヴァルガス政権において、1937年からはじまったエスタード・ノーヴォ（新国家）体制¹⁰⁾ 下においては、同化主義のイデオロギーが支配的であった（住田, 2000, pp. 127-129）。

1938年12月に外国語学校、主として日・独・伊の枢軸国系の学校が全面的に閉鎖され、1940年1月には外国人登録と鑑識手帳の取得が義務付けられた。また、1941年8月には外国新聞の発行が禁止される。このような状況の中で、同年12月の太平洋戦争開戦を迎えることとなる。太平洋戦争勃発後、翌1942年1月に日本とブラジルの国交は断絶、それに伴い大使館など在外公館は閉

9) 脇坂ジュニー明子（わきさか・じゅにー・あきこ、1926年サンパウロ州バウルー生まれ）へのインタビューによる。

10) エスタード・ノーヴォ（新国家）体制とは、住田（2000）によると、ヴァルガス大統領の独裁体制であり、「ポルトガルの当時の独裁者サラザールの下で出現した体制を手本にしたともいわれ、明らかにその頃のヨーロッパを中心に展開していたファシズムの風潮を反映したものであった」また、「ナショナリズムの高揚が、ヴァルガスの独裁体制の特徴の1つである」とされ、「その内容は、革命による独裁体制の確立によって国家の統一を推し進め、表面上は民衆の政治参加を強調し、国民共通の意識としての『ブラジリダデ』、すなわちブラジルの民族中心の政策を行うことであった」とされている（pp. 127-128）。また、同体制の移民政策については、「ナショナリズムの高揚が進められる中で、移民の同化政策が実施され、1938年には移民審議会が設立された。その任務は移民のブラジル化政策である」（p. 128）と規定されている。

鎖され、先のコンデ街の日系住民に対して、州保安局から立ち退き令が発せられた。日系をはじめとする枢軸国系住民は不自由な生活を強いられることとなったが、ほとんどの日系人は戦勝を信じていたとされる。1945年6月6日には、ついにブラジル政府が日本へ宣戦布告、そして同年8月15日の日本の降伏を迎える。これ以後、ブラジル日系社会はそれに続く、勝ち組・負け組の抗争による戦後の混乱期へと続いていくのである。

この間、大正小学校では、1941年10月には新校舎増築が実現したが、科目は日本語教育からブラジルの歴史、・地理、ポルトガル語へと切りかえられた。また、資産が凍結されるのを避けるため、経営母体はサンパウロ日本人連合会から二世3人を主体とする維持組合へ名義変更された。同校は何度も経営困難な状態に陥りながら、苦しい戦中を乗り切り、1966年に閉鎖されるまで存続する。

聖州義塾は、先に述べたように、「日本文化の発信機関として、当局から目をつけられていたため¹¹⁾」、1942年に閉鎖を余儀なくされる。

聖フランシスコ・デ・シャビエル学園は先ほど述べたように、戦後も存続。1951年には聖フランシスコ・デ・シャビエル中学として認可され、1966年には高等部を設け、聖フランシスコ・デ・シャビエル高等学校となる。現在は幼稚園から高等部までを有する有力私立校に発展している。

サンパウロ裁縫女学院は、第二次世界大戦中も発展を続け、1944年には在校生300名を数え、ナショナリズム政策をとる当局にたびたび問題視された（佐藤, p. 74）。ただ、同校は戦中・戦後の混乱期を生きのび、現在財団法人赤間学園セントロ・エドカシオナル・ピオネイロ校として、幼稚園から高等部まで約800名の生徒を有する有力校に発展している。

むすびにかえて

以上確認できたように、サンパウロ市リベルダーデ地区は、多くの日系教育機関が集中し、まさに戦前・戦中の日系教育の中心としての役割を果たしていたと言えよう。それぞれの日系教育機関の役割を最大公約数的に見ると、次のようになる。

日系コミュニティのウチにおいては、日本語教育を通して子弟のコミュニケーション力強化、さらに世代間を縦断するコミュニティセンターとして、文化的・精神的統合の象徴としての役割を果たしていた。また、コミュニティのソトたるホスト社会にむけては、「日本文化」発信とともに、時にブラジル社会への適応・同化促進機関としての複雑な役割を果たしてきたと言える。しかし、これらの役割には、時期的な変遷や地域的な相違、また学校ごとの方針の違いが見られることは明らかである。

小嶋（1998）は日系ブラジル人の教育目的の変遷を、次の4段階に区分している（pp. 84-85）。

11) 小林成十（こばやし・しげと、1934年サンパウロ生まれ）へのインタビュー調査による。

- ① 無学文盲を避けるための教育 (1908～1920年)
- ② 日本国民としての教育 (1920年代～第二次世界大戦)
- ③ 日系ブラジル人としての教育 (1947～1980年代)
- ④ ブラジル人としての教育 (1990年代)

小稿で取り扱ったのは上記の区分の①～②の段階であるが、サンパウロのような都市の場合、1937年後半からのナショナリゼーション政策への対応から、日本語教育を制限・停止し、ポルトガル語教育に力を入れるなど、③に相当する段階はもう少し早くからはじまっていたのではないかと考えられる。この問題に関して、今後は生徒のアイデンティティ形成や個々の学科のシラバスやプログラムの変遷に注意を払っていく必要がある

具体的には、個々の機関の教育理念や学校経営の背景、教師や児童生徒の供給、父兄の動向、学科目や使用教科書、時間割、ブラジル学校との役割分担などの詳細な分析を進めていく必要があるだろう。これからの主な調査項目として、学校設立・運営の理念、運営母体、授業科目、時間割、教科書、教授法、校歌、校旗、教員、生徒、諸行事、学校生活、課外活動、学費、進路など、多くのトピックスについての詳細な調査が必要となる。また、今回は日系コミュニティ側の資料にもとづいて考察を進めたが、ホスト社会側のデータや日本側資料とのつき合わせも必要であろう。

本研究のインフォーマントの中には、リベルダーデ地区周辺の特徴として、ペンソンと呼ばれる下宿屋の多さをあげることがしばしばあり、小稿で考察した諸学校への通学や入学準備のため、近辺に居住した日系人も多かったことが考えられる。これらのペンソンもまた、広い意味での日系教育機関の一つととらえることができ、後の東洋街発生の契機の一つとして、戦前のこの地区への日系人口や関心の集中が注目される。すなわち、「学校」と名づけられた教育機関だけでなく、それに付随する寄宿舍やペンソンとの関係を、もう少し掘り下げて調査する必要がある。1942年に閉鎖を余儀なくされた聖州義塾も寄宿舍としての性格が強かった。戦後も継続した他の学校との相違もふまえて、さらなる調査が必要であろう。

戦後も視野に入れた視点、また、日系移民教育史やブラジルの多文化教育というようなマクロな視点で見ると、小嶋 (1998) の③～④の段階における時間的展開 (日系教育機関の継承と変容の諸相) と空間的展開 (日系教育機関の拡散・郊外化・ブラジル化) について、さらに戦後から現代の資料収集とその分析を続ける必要がある。以上のことは、今後の研究の課題となろう。

最後に、戦前・戦中の日系教育機関のリベルダーデ地区集中と50年代以降の東洋街形成との関連について言及しておく。筆者は、1953年にガルヴァン・ブエノ通りにブラジル最初の日本映画専門館シネ・ニテロイが開館し、その集客力を見越して日系商店が集まってきたことを、東洋街形成の第一の契機と考えていた (NEGAWA, 2001)。しかしながら、小稿で見たように、これらの日系教育機関がリベルダーデ地区に集中したことは、この地区への日系人口や関心の集中と相関関係にあったことを意味する。リベルダーデ地区の日系の古老たちが語るように、現在東洋街の中心となっているリベルダーデ広場、ガルヴァン・ブエノ通りやグロリア通り界限は、戦前

には静かな空間であった (ACAL, pp. 49-52)。しかし、1920年代から30年代にかけての日系教育機関の集中により日系人の関心を引き、それ以後の人口集中をうながすことになった。この人口と関心の集中が、後にシネ・ニテロイの出現とともに、同地区がハレの空間、すなわち世界最大の日系エスニックタウン東洋街へと変貌していく要因の一つとなったと考えられるのである。

リベルダーデ地区日系教育機関略年表

年	月	日	出 来 事
1914 ～ 15?			大正3～4年頃、コンデで田頭(たがしら)甚四郎(1912渡伯)なる青年が3～4人の子供にイロハを教えていた。(年表, p. 36)
1915	10	07	大正小学校, 聖市コンデ・デ・サルゼーダス街38番に, 宮崎信造らにより創設される。最初こそ生徒3人の寺子屋式であったが, 後には後援会もでき, 生徒はどんどん増えていった。(年表, p. 36)
1916	01		大正小学校, コンデ街51番に移り, 同年48番に戻り児童10数名となる。(年表, p. 36)
1919	01	29	大正小学校, 私立公認校の資格をとり, 最初の日系ブラジル学校となる。(年表, p. 36)
1920	01	23	大正小学校, 後援会創立 (年表, p. 36)
1924	06	04	大正小学校初代校長であった宮崎信造没 (年表, p. 36)
1925	09	07	小林美登利, ガルヴォン・ブエノ街85番(現409番)に聖州義塾開設 (年表, p. 54; 商 p. 13)
1927	12	14	在伯日本人教育会(後の在サンパウロ日本人学校父兄会)設立 (年表, p. 59)
1928	03	18	イエズス修道会, 聖フランシスコ学園をリベルダーデ街149番に開校 (年表, p. 60)
1929	08	09	在サンパウロ日本人学校父兄会, サン・ジョアキン街67番に設立 (年表, p. 65)
	10		大正小, サン・ジョアキン街へ移転 (年表, p. 64)
1932	03	03	日伯裁縫女学校創立 (年表, p. 70)
	05	26	聖フランシスコ学園の三階建て新校舎落成 (年表, p. 70)
	04		日本人小学校, ブラジル国内には187校。未届け校も20校を数える (年表, p. 73)
1933	04		赤間重次・みちへ夫妻がサンパウロ市トラベッサ・サンパウロ街に裁縫教授所を設立。同年8月にはコンセリエイロ・フルタード街18番に移転し, サンパウロ裁縫女学院と改称 (赤, p. 72)
	04	19	日伯裁縫女学校, ラヴァペス街に移転 (年表, p. 73)
	06		サンパウロ裁縫女学院創立 (1957年財団法人として登録, 赤間学院となる) (年表, p. 74)
	01	10	サンパウロ裁縫女学院, コンセリエイロ・フルタード街116番に移転 (赤, p. 72)
1934	07	16	外国移民二分制限法(事実上の日本移民制限法)公布 (年表, p. 77)
	10	21	大正小学校で, 学生連盟発足 (年表, p. 78)
1935			聖フランシスコ学園女子部, リベルダーデ広場143に開設される (聖, p. 51)
	08	01	サンパウロ裁縫女学院, サンジョアキン街216番に移転し, サンパウロ裁縫女学院と改称。日本語小学部開設 (赤, p. 72)

1936	12	20	サンパウロ女学院で第1回女学部並びに専修部の卒業式挙行（年表, p. 83）
1937	11	10	14歳未満者に外国語の教授を禁止（年表, p. 86）
	11	12	大正小講堂にて、藤原義江の独唱会（年表, p. 86）
1938	11	06	聖州義塾で崎山比佐衛講演会「アマゾン語る」（年表, p. 88）
	12	25	全伯にちらばる伊・独・日を主とした外国語学校に閉鎖命令（年表, p. 89）
1941	04	26	サンパウロ女学院, タマンダレー街849に移転（赤, p. 73）
1942	01	29	ブラジル, 日本との国交断絶, それに伴い在外公館閉鎖（年表, p. 96）
	02	02	コンデ街から日本人立ち退き命令が発令（年表, p. 96）。大正小学校や赤間女学院に転入する日系子弟が増加
	12	06	サンパウロ女学院, 創立10周年。突然, 裁判所から即刻強制退去命令が発せられ, 急ぎょ, ベルゲイロ街へ移転（赤, p. 73）
1944	01	08	サンパウロ女学院を告発する記事が, 伯字紙に掲載される。「サンパウロ市の真ん中に三百人の生徒を擁し, 日本精神昂揚を図る黒幕の学校がある。学務当局は怠慢だ」というもの（赤, p. 74）
	08	15	サンパウロ女学院, 伯人視学官が授業を巡視中, 日本語で書かれた生徒の裁縫帳を発見。禁止された日本語が校内で見つかったことにより, 学校閉鎖命令が下る（赤, p. 74）
	10	10	サンパウロ女学院, 関係者の尽力により, 同年10月には校名をエスコラ・ベルゲイロに改め, 新設学校として開校（赤, p. 74）
1945	06	06	ブラジル, 日本に宣戦布告（年表, p. 99）
	08	15	日本, ポツダム宣言受諾の放送

* 年表中の略号, 「年表」はサンパウロ人文科学研究所編（1996）, 「聖」はカトリック教義研究会編（1949）, 「赤」は佐藤（1985）, 「商」はACAL（1996）に拠った。

引用文献

- 青木新刀（1955）「初期のサン・フランシスコ・シヤビエル学園と設立の由来」暁の星会編『暁の星, 在伯日本人布教沿革誌』暁の星会 pp. 69-76
- カトリック教義研究会編（1949）『ギード神父とサン・フランシスコ学園』カトリック教義研究会
- 香山六郎編（1949）『移民四十年史』
- 小嶋 茂（1998）「ブラジル日系移民と教育」『異文化間教育』12号 pp. 84-86
- （2000）「在伯邦人子弟教育問題をめぐる外務省報告書等に見られる教育方針——1920年代以降, 戦前の日本側史料を中心に——」小島勝編著『「在外子弟」教育の規定要因と異文化間教育に関する研究』pp. 105-119
- サンパウロ人文科学研究所編（1996）『ブラジル日本移民・日系社会史年表——半田知雄編著改訂増補版——』サンパウロ人文科学研究所
- 佐藤皓一編（1985）『財団法人赤間学院創立五十年史』財団法人赤間学院
- 住田育法（2000）「新指導者ヴァルガス」金七紀男・住田育法他編『ブラジル研究入門—知られざる大国500年の軌跡—』晃洋書房 pp. 121-129.
- 日本移民80年史編纂委員会（1991）『ブラジル日本移民八十年史』サンパウロ, 移民80年祭典委員会
- 根川幸男（2006）「マルチエスニック都市サンパウロにおける「日本文化」の表象——東洋街における新伝統行事を中心に——」『平成16～17年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書・現代ブ

- ラジルにおける都市問題と政治の役割』 pp. 129-140
- 半田知雄 (1970) 『移民の生活の歴史——ブラジル日系人の歩んだ道——』 サンパウロ人文科学研究所
 伯刺西爾時報社編 (1933) 『伯刺西爾年鑑・後編』 サンパウロ, 伯刺西爾時報社
- ブラジル日本移民70年史編纂委員会 (1980) 『ブラジル日本移民70年史』 ブラジル日本文化協会
- 前山隆編 (1996) 『ドナ・マルガリータ・渡辺——移民・老人福祉の五十三年——』 御茶の水書房
- 森本豊富 (2005) 「エスニックコミュニティ母語学校としての日本語学校——カンプトン両学園を例に」
 吉田亮編著『アメリカ日本人移民の越境教育史』 日本図書センター pp. 89-112
- 吉田 亮 (2005) 「日本人移民の越境教育史に向けて」 吉田亮編著『アメリカ日本人移民の越境教育史』
 日本図書センター pp. 3-25
- ACAL (1996) *Liberdade*. ACAL
- AREÚJO, Oscar (1940) “Enquistamentos Étnicos”. In. *Revista de Arquivo de Municipal de S. Paulo*
LXV. São Paulo, Divisão do Arquivo Histórico.
- EDWARDS, John (1985) *Language, Society and Identity*. Oxford, Basil Blackwell.
- LEITE, Moreira Dante (1969) *O Caráter Nacional Brasileiro: História de uma Ideologia* (2ª Ed.). São
 Paulo, Livraria Pioneira Editora.
- NEGAWA, Sachio (1998) 「サンパウロ東洋街の形成と変容に関するノート」 In. *Anais do IX Encontro*
Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro Latino
Americano. Assis, Unesp.
- (2001) “Um Comerciante Japonês: História de Vida no Bairro Oriental de São Paulo”. In.
Estudos Japoneses 21. São Paulo, FFLCH/USP.
- (2005) 「日伯比較文化史の可能性——サンパウロ東洋街における新伝統行事の創出——」 In.
Anais do III Congresso Internacional de Estudos Japoneses no Brasil e XVI Encontro Nacional de
Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. Brasília, UnB.
- ウェブサイト
- Colégio São Francisco de Xavier. “Colégio São Francisco de Xavier: História”. <http://www.sanfra.g12.br/historia.htm>
- 校友会誌
- 『曠野』 9号. サンパウロ, 暁星学園 (1940年2月)
- 新聞記事
- 「大正小学校, その“歩み”」 1~12 (1975年9月30日~10月18) 『パウリスタ新聞』 6649~6663号
- インタビュー調査
- 赤間アントニオ晃平・赤間エルザ澄子 (サンパウロ州サンパウロ市) 2006年4月6日
- 新井静枝 (サンパウロ州サンパウロ市) 2006年3月31日/7月3日
- 川村万里子 (サンパウロ州サンパウロ市) 2006年4月5日
- 小林成十・小林眞登 (サンパウロ州サンパウロ市) 2006年11月16日
- 渋谷信行 (ミナス・ジェライス州ベロ・オリゾンテ市) 2006年4月28日/10月27日
- 脇坂ジェニー明子 (サンパウロ州サンパウロ市) 2006年7月3日

付記: 筆者が中村尚司先生と故鶴見良行先生の知遇を得、龍谷大学大学院経済学研究科の中村・鶴見合同ゼミに非正規の聴講生として参加するようになったのは、1990年の秋だったと記憶する。その後、筆者の関心が移民研究へ向けられ、ブラジルをフィールドとするようになったのも、両先生のご指導の賜物であったと思う。この場を借りて、両先生に心より感謝を捧げたい。また、上記のインタビュー

に応じてくださったインフォーマントの皆さんや調査にご協力いただいたすべての方々に謝意を表したい。

(受付 2006年11月30日)